

列品資料目録（△は滋賀県指定有形文化財、□は愛荘町指定有形文化財）

愛荘町立歴史文化博物館 令和3年度夏季特別展
「愛智河架橋略史―無賃橋と御幸橋―」

会期 令和3年7月17日から8月27日まで

番号	区分	展示資料・作品名	員数	和 暦 等	西 暦	備 考	所 蔵 等
第1章 御幸橋小史（明治・大正期）							
1		愛智川無賃橋維持方法上申書写	一綴	明治十二年十二月	一八七九	高田謙一家文書	個人
2		『滋賀県管内神崎郡誌』	一冊	明治十三年一月刊行	一八八〇	―	個人
3		『滋賀県管内愛知郡誌』	一冊	明治十三年三月発兌	一八八〇	―	愛荘町立歴史文化博物館
4		無賃橋流失取換諸費書	一綴	明治十三年六月	一八八〇	小幡共有文書	滋賀大学経済学部附属史料館寄託
5		愛知川橋梁篤志金人員簿	一冊	明治十三年七月	一八八〇	高田謙一家文書	個人
6	△	愛知川橋梁維持方法取設願書	一綴	明治十三年八月二十七日	一八八〇	滋賀県行政文書	滋賀県立公文書館
7	△	愛知川橋梁再架設嘆願書	一綴	明治十四年十月十三日	一八八一	滋賀県行政文書	滋賀県立公文書館
8	△	愛知川橋構造改良伺文	一紙	明治十八年二月二十一日	一八八五	滋賀県行政文書	滋賀県立公文書館
9	△	御幸橋渡橋式祝辞草稿	一綴	明治二十四年十月十四日	一八九一	滋賀県行政文書	滋賀県立公文書館
10	△	御幸橋桁構墜落平面図	一紙	明治二十四年十月二十六日	一八九一	滋賀県行政文書	滋賀県立公文書館
11	△	愛知川仮橋修繕設計書	一紙	明治二十五年一月二十二日	一八九二	滋賀県行政文書	滋賀県立公文書館
12		御幸橋竣工式祝辞草稿	一紙	大正十五年	一九二六	愛知川町引継文書	愛荘町立歴史文化博物館
13		御幸橋竣工記念絵葉書	一葉	大正十五年頃	一九二六	―	愛荘町
14		『近江鉄道沿線名勝之栞』	一葉	昭和三年五月	一九二八	―	愛荘町
第2章 愛知川を越える							
15		愛知川川越書付	一紙	天和三年三月	一六八三	小幡共有文書	滋賀大学経済学部附属史料館寄託
16		川越人足につき詫書	一綴	文政七年三月六日	一八二四	成宮章浩家文書	愛荘町立歴史文化博物館
17		愛知川伝馬川越賃銭返答	一紙	延享元年三月	一七四四	小幡共有文書	滋賀大学経済学部附属史料館寄託
18		愛知川常橋取替口上書写	一紙	文化六年九月	一八〇九	増田良一家文書	個人
第3章 無賃橋の架設							
19		徳本泰平録	一冊	天保二年	一八三一	坪田家文書	個人
20		歌川広重 木曾海道六拾九次之内 恵智川	一枚	天保十年頃	一八三九	大判錦絵	愛荘町
21		成宮弥次右衛門・塚本助一画像	一幅	元治元年冬写	一八六四	絹本着色・成宮章浩家文書	愛荘町立歴史文化博物館
22	□	小澤華嶽筆 愛智河架橋絵巻	一卷	江戸時代後期	―	紙本着色	愛荘町立歴史文化博物館
23		無賃橋仕法につき返答	一綴	天保六年七月	一八三五	小幡共有文書	滋賀大学経済学部附属史料館寄託
24		牛頭天王万歳録	一冊	天保九年六月吉日	一八三八	愛知川共有文書（公方座）	滋賀大学経済学部附属史料館寄託
25		鄭元偉書 太平橋記	一幅	天保十三年春正月	一八四二	紙本墨書・成宮章浩家文書	愛荘町立歴史文化博物館
26		太平橋和歌三首懐紙	一紙	江戸時代後期	―	紙本墨書・成宮章浩家文書	愛荘町立歴史文化博物館
27		江州越川駅題詩次韻	一紙	嘉永三年夏五月	一八五〇	紙本墨書・成宮章浩家文書	愛荘町立歴史文化博物館
28		石燈籠建立口上書	一綴	弘化二年正月	一八四五	西村正司家文書	愛荘町立歴史文化博物館
29		御馳走橋につき請書	一綴	嘉永元年九月三日	一八四八	神崎郡愛知川村文書	関西大学図書館
第4章 瑟瑟々―成宮家ゆかりの画人―							
30		壺に桜図（自賛七言絶句）	一幅	十九世紀前半	―	絹本着色	個人
31	前期	三芳野桜真図	一幅	十九世紀前半	―	絹本着色	個人
32		九重桜真図	一幅	十九世紀前半	―	絹本着色	個人
33		帆立桜図	一幅	天保二年	一八三一	絹本着色	個人
34		離合桜図	双幅	十九世紀前半	―	紙本着色	個人
35	後期	有明桜真図	一幅	文化七年	一八一〇	紙本着色	個人
36		桐谷図	一幅	文政八年	一八二五	絹本着色	個人

列品資料翻刻

1 愛智川無賃橋維持方法上申書写

〔表紙〕

「愛知川無賃橋古今原由書

神崎郡小幡村坪田利右衛門所有ノ写ス

高田吉兵衛

〔前略〕

神崎郡愛智郡ニ跨ル愛智川無賃橋維持方法上申書

〔中略〕

人力車荷車ニ限り賃錢予算モ仕候処、両川岸ニ川番モ置、小屋造リヨリ雇入人之賃錢ヲ差引候得ハ為差金錢モ無之、既ニ前々ヨリ無賃橋ノ広示モ有之一国ノ名譽ニモ候得ハ、矢張無賃橋ニ広ク決定仕度、因テニケ三条件老ツニハ両村地元為重者ヨリ各地券証ヲ抵当ニ差出し愛知神崎両郡中ノ畜財家ニテ年限ヲ以テ安利ノ金員ヲ借り入、是ヲ担当人相撰堅固ニ貸附、積立利益ヲ以テ永続仕度候ト申者有之、ニツニハ広ク両郡ノ有志家ニ語り全仕法講相企相続仕度ト申者モ有之、何レモ両件トモ畜財家ニテ有徳人望ノ者一郡ニテ三四名ツ、撰任仕、其人へ周旋方都テ金員請払ニ至ル迄負担致貴ヒ候ハ、一般ニ人心安堵方法堅固永続可仕義ニ奉存候、乍併畜財有徳家ニテ地元両村ノ者ヲ依頼仕候テモ不顧恐惶両郡長殿江同様連署ヲ以上献仕候、則積立方法及ヒ講人等御撰定ヲ以被仰付候様蒙御配慮申度奉懇願候、何卒御保護之思召ヲ以御聴届何分ノ御沙汰被成下候ハ、難有仕合ニ奉存候、謹言

神崎郡小幡村

明治十二年

十二月

村総代

戸長

川村勘助

神馬六郎兵衛

愛知郡愛知川村

村総代

戸長

中野利右衛門

森野幸右衛門

愛知郡中宿村

高田吉兵衛

〔以下略〕

6 愛知川橋梁維持方法取設書

愛知川橋梁維持方法取設ノ儀ニ付願

中山道愛知川橋梁ハ、過明治十一年御巡幸之際新タニ架橋セラレ、示後旅人便利ノ為メ該橋梁篤志金ヲ以無賃橋トナシ、永世維持致シ度ニ付、低価御払下ケ相成度旨地元村ヨリ上願被致、既ニ御聞届相成候処即今永世維持之目的難相立、且地元両村ニ於テ負担候義實際難行届趣、然ルニ該事業タル素ヨリ美挙ナルハ、勿論往来旅人ノ便利ヲ得ル少ナカラサル義ニ付、管庁ニ於テモ特別之御詮議ヲ以低価御払下相成タル儀ト存候、就テハ此俟前途維持之目的不相立候テハ遺憾之次第ニ付、今般神崎愛知両郡之有志者則別冊名前之者共、各自頭書之通り篤志金ヲ出シ、更ニ別紙之方法ヲ取設ケ該無賃橋維持致シ度候間、御允可被成下度此段奉願候也

能登川村

阿部市郎兵衛代理

阿部周吉

川並村

塚本定右衛門代理

松居吉右衛門

宮莊村

高田善右衛門

北町屋村

市田太郎兵衛代理

市田喜兵衛

宮莊村

藤井善助代理

藤井彦治郎

愛知郡

篤志出金人総代

小田苺村

小林吟右衛門代理

小林惣助

下枝村

藤野四郎兵衛

滋賀県令籠手田安定殿

神崎郡

明治十三年八月廿七日 篤志出金人総代

7 愛知川橋梁再架設嘆願書

愛知川橋梁再架設ノ儀ニ付歎願書

〔中略〕

本年九月十三日ヨリ十四日ニ亙ル暴風雨ノ為メ、管内諸川堤防橋梁破壊相成候分、急破工事御目論見等臨時県会ノ決議ヲ經由シ、御着手相成候趣キ奉拜承候ニ付、前陳ノ旨趣御憐察被成下、本橋架設ノ失費地方税ヲ以テ御造築相成候様奉懇願候、就テハ臨時県会へ議案御下附ノ上、該会ノ公議憐決相成候様御説明被成下為、目論見概算書相添只管奉歎願候也

明治十四年十月十三日

愛知川橋梁篤志出金人

〔以下略〕

8 愛知川橋構造改良伺文

〔前略〕

愛知川橋構造改良之義、御下命之次第モ有之ニ付、計画調査ニ取掛度、然ルニ鉄道ニ架スル如キ橋梁ハ、未夕本県ニ於テハ実施セシ義ハ無之ヲ以テ、計画上掛合之辺モ有之候付、構造方及ヒ經費等之義、近傍出張之鉄道局技員ニテ、右出長シタル向へ県テ詳密指添テ受ケ候様仕度、因テ左に此照會書案取調併テ相詞候也

9 御幸橋渡橋式祝辞草稿

県下中山道ヲ横断スル愛知川ハ、県下ノ大川ニシテ古来橋梁ノ設ナク近時終ニ木橋ヲ架設セント雖モ、構造其宜キヲ得ス不便言フヘカラサルナリ、地方有志者諸君夙ニ見ル所アリテ之カ改築ヲ熱望シ、積年勞苦奔走遂ニ資金八千有余円ヲ抛集シ、以テ之ヲ地方税ニ寄付シ速ニ本功ノ成ランヲ欲セリ、県会モ亦此挙ヲ贊シ為メニ巨額ノ地方税支出ヲ議決シ、今ヤ本道ニ此一大橋梁ヲ架設スルヲ得タリ、

〔中略〕

此ニ於テ橋梁初テ堅牢トナリ道路始テ便利トナリ、運輸交通ノ盛ナル期シテ候ツヘシ、豈国家ノ為メ慶賀セサルヘケンヤ、茲ニ本日渡橋式ト開道式ト併セ行フニ方リ一言以テ之ヲ祝シ併セテ諸君ノ勞ヲ謝スト云爾

明治廿四年十月十四日

12 御幸橋竣工式祝辞草稿

祝辞

御幸橋ノ改築工事終リ本日ヲトシ〔茲〕竣工ノ式典ヲ挙行セラルハ、邦家ノ為メ將亦地方ノ為メ洵ニ欣幸トスル所ナリ、抑モ本橋梁ハ明治十一年十月聖駕巡幸ノ事アリ、御幸橋ノ名蓋シ此レニ起因ス、後巨費ヲ投シ架橋サレ県下橋梁ノ巨擘トセラレタリ、然レドモ其規模狭少ニシテ時代ノ進運ニ伴ハザルノミナラス、腐朽^{〔頹廢〕}廢頹ヲ来シ交通上支障多カリシガ今回改築ナリ、茲ニ渡橋ノ式ヲ挙ゲラル宴ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ、現今將來益々交通繁運輸頻繁其慶ヲ加スルニ際シ、至大ノ効ニ齎スノミナラズ、地方ノ開發産業ノ進展期シテ待ツ

ベキナリ、一言以テ祝辞トス

年月日

町長

15 愛知川川越書付

〔包紙〕

天和三年亥三月 愛知川川越御書付 御奉行様六印被下置候

覚

一愛知川水出候時分、往還之通りハ不及申彦根御用之荷物御家中御侍衆并御家中之荷物河渡シ人足出シ、駕籠人足共ニ川之内計河越可申候、往還之儀ハ下々乗懸共ニ相對ニ而代物取渡可申候

一御大名衆御通り之節ハ代物取不申、御馳走ニ川渡可申候、以上

〔以下略〕

16 川越人足につき詫書

奉指上一札之事

一今般御帰国ニ付、昨晩当宿御止宿被為遊候所、御供立之内御病人等も有之ニ付、宿駕等差出可申様被仰付候処、彼是御断等も奉申上候、其上愛知川出水有之ニ付、川越人足賃錢等も申請置、右於川場仮橋を越立、且ハ御供立御越立も可被遊程之義ニ人足之者共越立も不仕候段、重々不届ニ被為思召、既ニ御存分ニも可被遊候条、重々御尤至極、一言之申訳無御

坐奉恐入候、右躰之義出来仕候義ハ、兼而宿役人共取示シも不行届段、御詫之申上方も無御坐奉恐入候処、右様被成下置候而者一宿之及極難渋候二付、段々奉御詫申上候処、誠ニ以厚キ御憐愍之御慈悲ヲ以、此度之義ハ御内濟被成下置、宿中一統難有仕合奉存候、右二付、人足之者共之義ハ領主江奉訴、敵料等も可被申付候得者、向後聊之義共有之間敷、万一聊御不敬之義共及出来申候ハ、如何躰之御義ニも可被仰付候、依之御詫証文、仍而如件

中山道

愛知川宿

文政七年

御本陣

申三月六日

甚五左衛門(印)

問屋

孫次右衛門(印)

同

太郎右衛門(印)

同

清次郎(印)

庄屋

長次郎(印)

横目

常右衛門(印)

柳川様御家中

肝煎

津村久右衛門様

八右衛門(印)

西原貞次様

17 愛知川伝馬川越賃錢返答

〔包紙〕

「延享元年甲子年三月

石黒清左衛門様方 愛知川伝馬川越賃錢御尋人書付写」

〔前略〕

愛知川勸進橋、御朱印御伝馬ハ不及申上、其外諸土様方不残賃錢不申請候、尤旅人水相応ニ橋錢取申候、何程高水ニ而も拾文宛之外ハ取不申候、此段者地頭役人中方毎度敵敷被申付候故、私共方も橋守之者共へ度々入念申渡候、勸進橋之義、愛知川宿小幡村両村方掛させ申候橋錢も両村へ取申候得共、助成ニ相成候義者御無御座候御事

〔以下略〕

18 愛知川常橋取替口上書写

為取替常橋之事

〔中略〕

右者此度両村并助郷惣代立会之上、前件之通無覆蔵相談之上常橋相懸候二付、件之通相定、両村へ引受被下忝存候、誠ニ介郷為方ニ相成可申与大慶仕候、何分精々御世話可被下候、依之為取替証文、仍而如件

文化六年

愛知川宿助郷惣代

巳九月

磯部村

庄屋 伝左衛門

豊満村

庄屋 太 兵衛

嶋川村

庄屋 次郎右衛門

小幡村

土橋村

御役人衆中

庄屋 武 介

愛知川宿

御役人衆中

19 徳本泰平録

〔表紙〕

「天保貳年

辛卯十月日

徳本泰平録」

〔前略〕

天保二年辛卯九月廿七日、無賃橋之規矩相立、永久之印ニ哉、殊ニ晴天諸人広キ川原ニみち／＼り、夫方神主三人ノ休足所へ帰り、酒赤飯出し相図之拍子木を打と餅蒔、棚方若者四方へ餅を蒔、緒人我レおとらじとおし合て、合高声にて爰へ／＼と手まねきを致し、男女老若見物夥敷事、筆紙ニ難尽、是ヲ聞伝へ近村方柿売菓子売一盃酒田楽売甘酒大勢寄集り、しばらく之内三ヶ津繁昌之土地ニ相成候、中にハ酒肴笹井など持参致、広川原に毛氈杯を引たのしミ被申候、もち蒔も相濟、神主三人帰宅被致、七ツ時過ニ相濟見物おもひ／＼ニ罷帰リ被申候事

〔中略〕

〔裏表紙〕

「天保二卯九月識作

坪田利右衛門」

23 無賃橋仕法につき返答留

〔表紙〕

「 神崎郡小幡村

庄屋与次平

天保六年乙未七月廿九日

御公役様宿々取締として御廻宿被遊ニ付

川場之始末御尋ニ付書上申候留也

〔中略〕

一中仙道愛知川仮橋之儀ハ、是迄橋錢取来り申候所、右之者共文政十二丑年領主役場江無賃ニ而諸人通行為致度趣御願申上、御聞濟之上諸方寄附申受、尚又領主表方も格別之御憐愍ヲ蒙り、旁々以天保二卯年九月無賃橋ニ相成候、万一大水ニ而橋落申候節ハ、水引落次第当分橋板掛渡し、旅人通行為致申候、干川ニ相成申候得者同様仮橋相掛申候儀ニ御坐候、尤仕法金之儀ハ領主へ御預ケ申上、年々利足頂戴仕、永世橋掛諸人用ニ仕候義ニ御坐候、大方者仕法金相調申候、右御尋ニ付奉申上候右之趣御尋ニ付奉申上候間、此段御届ケ奉申上候、以上

愛知川村

庄屋 勘 平

天保六年

横目 半之右衛門

未七月

小幡村

肝煎 弥次右衛門

庄屋 与次平

横目 庄 平

右此度御公役様御尋ニ付、書上ケ候通ヲ彦根御役所様へ茂写相認メ指上申置候

24 牛頭天王万歳録

〔表紙〕

「 橋守護神

牛頭天王

万歳録

牛頭天皇奉川原江移由来

〔中略〕

世話人成宮常右衛門、夫より宮前神主中村出雲殿を頼ミ地祭り相濟、八日夕方出雲殿本裳束ニ而役人頭分夫々上下着ニ而川原へ御神體移らせ給ふ、御供致し御遷座之御規式相濟、翌九日夕高張燈灯大橋方川原迄相續候、幟数多川風ニ靡き神前には御湯華を奉獻、笛・太鼓・摺金等之役者若連中相勤、宮前中村方者獅子舞を奏し奉り、其外餅時ニ相添飾り物・狂言等近在方参詣賑々敷事ニ候、是方例年集会上老人四五人宮守撰ミ、永々六月七日ニ橋神祭礼之式相勤申度事、元来当駅之儀者往古方悪名国々浦々迄流布する事川場の争ひあるゆへなり、駅内通行之旅人何之障り有て敷悪評をいわんや、其障たる第一者橋也、橋は愛知川村小幡村両村之橋にて通行者天下之人なり、永く両村之汚名を灑くも又此橋なり、依而年々橋神を祭らハ自然と人氣も和し、村中安全子孫長久之基ひともならんもの歟

天保九年

戊戌六月吉日

25 鄭元偉書 太平橋記

江州愛智川乃係伊勢国之界源遠流長、東武往来必由此川為跡、平日水乾沙平可以著履而渡、至大雨時洪水自上流来、有漫天之勢、当此之時上自公卿下至士民不可得而渡、昔有士民、私設仮橋多收橋錢方許、往還貧賤之輩、自惜出錢褻衣涉水、遂至溺而失命者頗多十二年前、士人有成宮忠喜視之傷心乃請四方人氏隨志捐貲即以其貲募匠興工築架長橋以成人馬往来之便、自時厥後人免溺水之憂、嗚呼架橋貽利于人者、洵可謂善人、是以諸人無不贈詩歌嘆美之余有役于束武往還此橋始聞此事、因感其厚志、聊誌架橋顛末、永垂于不朽云

道光癸卯春正月書為 成宮忠喜氏清覽

琉球国儀衛正鄭元偉撰

26 太平橋和歌三首懷紙

太平橋

旅人を瀨になかさしと淵よりも深き心に懸し橋かな旅人の足ぬらさしと里長の心につ代経とも朽しと思ふ

愛知川の早瀨に懸し橋柱よろつ代経とも朽しと思ふ

泰州

27 江州越川駅題詩次韻

使節東來渡海人 名山到处賦詩新 道光封冊知何歲
兩度身逢燕北春

中山鄭元偉 江州越川駅

題詩次韻

群山合合一源遙 此際須縁築此橋 惠澤偏如流水長

鄭君銘柱自昭々

再賡韻

西上路過湖東訪 成宮淡堂宅因得觀鄭元偉構橋紀文

及詩余叩次

其韻礎以為 忠喜翁

寿序

皇和嘉永三年龍集

庚戌夏五月既望

金城 希衣濟匡

28 石燈籠建立口上書

〔表紙〕

一 愛知川北岸

旅人目当石燈籠建立

世話方

平八

旅人目当石燈籠建立

抑愛知川と申者世に稀なる大川にて、川幅五町拾七間
余有之、旅行之諸人道を踏迷ふもの往古方幾千人とも
いふ、其数をしらす、中には終夜迷ひ呼はりて、人命
危きこと間々有之、五拾年以前「」湯和尚と申名

僧深くあわれみ、金堂村磯部「」村藤野氏なる両
人を頼み、川原兩岸ニ旅人目当の石燈籠を建られ候得
共、油料も無之「」燈其儘ニ相成申候故、近来川
南岸には「」常夜燈を被建候得共、未夕川北岸ニ
は無之、旅人難渋敷多く有之候故、仮に橋会所之内ニ
行燈をともし置候得共、永世ニハ無御座候故、心配仕
居候、何卒永世諸人助と思召、橋神牛頭天王常夜燈御
建被成下置候ハ、旅人目当ハ勿論、強盜犬狼を防の
一助ともなるへきものと爾云

石燈籠惣高サ式丈五寸

于時弘化二年

巳正月

世話人

愛知川宿

弥次右衛門

太郎右衛門

清次郎

栗田村

文右衛門

磯部村

久右衛門

29 御馳走橋につき請書

差上申御請書之事

一 此度諸家様御通行之節々、御馳走橋被仰付候ニ付、
則今二日橋掛場所并橋小屋御見分被成下置、難有仕
合ニ奉存候、尤橋掛場所往来方八間斗下之方ニ相懸、
御通行相済候ハ、直様橋板取上ケ置可申候、乍併
両三日之内御通行当有之候ハ、跡先斗橋板取上ケ
置、旅人老人茂通し不申、御通行之節相懸可申様被

為仰付奉畏候、猶又右御馳走橋之儀ニ付、若差障之
筋出来致候ハ、其節一統無腹臆談致シ窺出、聊
ニ而茂故障等出来候而者、却而為方ニ不相成候間、篤
と懸合致シ、一統心得違仕間敷段、被為御渡難有奉
畏候、依之河御用掛り助郷惣代并河役人連印仕、御
請書差上申処、仍而如件

嘉永元年

戊申九月三日

河御用掛り

愛知川

東田堂村

小田刈村

本持村

兵右衛門

孫兵衛

六平

助郷惣代

曾根村

同 上岸本村

同 野々目村

同 矢守村

同 磯部村

同 土橋村

同 肥田村

同 長野中村

同 稻葉村

利右衛門

半左衛門

忠平

五平

久右衛門

甚七

武平

久右衛門

清次郎

河役人四ヶ村惣代

愛知川

庄屋

横目

小幡村

庄屋

横目

御代官所様

源右衛門

次右衛門